

保健体育における「教科教育学」と「教科専門」を統合した大学院教育の在り方の検討 ー保健の授業づくりに焦点を当ててー

◎鈴木 秀人（教職大学院保健体育教育サブプログラム）

○佐見由紀子（教職大学院保健体育教育サブプログラム）

田中 愛（健康・スポーツ科学講座）

1 本プロジェクトの目的

教科教育学と教科専門の乖離を克服することを目指して展開してきた、これまでの教職大学院保健体育教育サブプログラムにおける授業の成果を踏まえ、主に保健の授業づくりに焦点を当てて、大学院の授業改善の方向を明らかにすることが目的である。

2 プロジェクトの概要

対象とした授業は「保健体育科授業の指導と評価」で、教科教育学（体育科教育、保健科教育）と教科専門（体育哲学）の代表的な学術論文を1授業1本ずつ精読させた。各回においては互いの専門を関連させずに、それぞれ単独で読解を深めることを目指す姿として提示した。

授業は、教科教育学（体育科教育、保健科教育）2名と教科専門（体育哲学）1名の計3名によるチームティーチングで進めた。授業1週間前に課題論文をウェブクラスに上げ、予め熟読した上で授業に臨むことを求めた。授業内では、論文の内容についてのグループ討議、そこでの議論内容の発表、質問や意見の交換を経て、その回の論文が専門領域となる授業担当者が総括的な意見を述べた。

今回の授業で取り上げた教科専門（体育哲学）の立場からの論文は、以下の3本である。

- ・滝沢文雄（1998）実践的能力としての「からだ」の賢さ：身体についての現象学的考察。
体育学研究 43(2)：79-90.
- ・滝沢文雄（2004）現象学的観点からの「心身一体観」再考：「身体観」教育の必要性。
体育学研究 49：147-158.
- ・坂本拓弥（2020）体育教師の指導言語が児童・生徒に〈ふれる〉ことについての哲学的試論。
体育学研究 65：171-186.

授業の最終回において、「子どもがからだを学び、からだを育てていくために、保健体育の授業はどうあればよいか」という課題を示し、これまでの学習を踏まえた考察をレポートとしてまとめさせた。

3 プロジェクトの内容

（1）教科専門の学術論文で示された視点とレポートに見る成果

保健体育の授業づくりにおいて一つの焦点となる「身体」について考えるために、上記の3本の体育哲学の学術論文で紹介された主たる内容は以下のようなものである。

- ・心身関係を検討するに当たり、〈私〉という実態をどのように捉えるか。
- ・身体観は、多様であり流動的である。
- ・学習指導要領が提唱する心身一体観を、安易に前提とすべきではない。
- ・望ましい身体観を獲得する必要がある。
- ・働きとしての体が変われば、それに伴って心のありようが変わる。

- ・身体が変わることによって、世界の見え方が変わる。
- ・世界の見え方が変わると、世界へのかかわり方が変わる。
- ・「からだ」が変わることによってこそ、心も変わる。
- ・からだには、からだ独自の「賢さ」が備わっている。

これらに着目しながら、グループ討議、そこでの議論内容の発表、質問や意見の交換を経て作成された期末レポートの一部を以下に紹介する。

『体育授業が生涯にわたって運動・スポーツに親しむことを目指すならば、できるできないということ以前に、運動・スポーツに向き合えるからだを作っていくことも重要であると考えられる。私はこれまで、児童生徒の運動をできないからできるにするためにはどうしたらよいかということばかり考えてきた。しかし、できるようになるためのからだを育てるという視点を持つことで、体育で何を学ぶのかという教科の目的を考え直すことができると考えられる』(Z)

①技術の習得とは異なる次元で、体育学習の在り方を解釈する必要性に気づいている。

『体育教師として、問いにあるような授業の在り方を実現するにあたり、「からだ」をどのように捉えるかということは、切り離して考えることはできない。「からだ」の定義が明確でない限り、あるべき授業の姿を論じることはできない』(M)

『「からだ」とは、その世界を感じ、外界および他者との関わりや自分を表現するなかで、自分自身を変容させる「場」そのものであるべきだと考えられる』(M)

②「からだ」そのものが何であるかを再考することの必要性を述べている。

『目に見える技術や、試験で測れる知識だけを学び、育む授業では目に見えない働きとしての身体を包括できていないのである。』

『滝沢は実践的な賢さを「物の物理が分かる、相手（動き、意図、気持ち、感情）が分かる、関わりが分かる、実践的な状況が分かる、雰囲気が分かる等の事柄が含まれている」ものとしている。これはまさに目に見えない身体の働きである』

『目に見えない身体の働きを学ぶには、からだを用いた経験が必要なのである／子どもがからだを学び、からだを育てていくこととは、肉体そのものに対する学びや成長に加えて、からだで経験し、できることを増やしていくことである』(A)

③からだの賢さの内実から体育観を再考しようとしている。

『からだは物的な入れ物としての意味ではなく、常に世界と相互作用し、その関わりを実感し自分自身をつくる場としての役割がある』

『したがって、保健体育教師として体育・保健の授業実践では、子どもたちに運動を通じた他者との相互作用から、自分自身のからだというものを実感することができ、からだの変化に気づき心も変化させることができるようにする必要がある。このような視点で自分自身にとってからだとは何かを考えさせられる体育・保健の授業を実践することができれば、からだに対して子どもたちの学びも観念的なものではなく、実感を伴うものとなり、からだを育てることができると考えられる』(T)

④実感を伴った身体観教育の必要性を指摘している。

『〈私〉が変われば世界が変わる、ということを実践の中で子どもたちに経験させ、身体が〈私〉と世界の媒介となっていることに気づかせる役割が体育にはあることが考えられる。また、体育に限らず、理想的な身体観を実生活に結びつけることの重要性や、実感を伴った体験学習の有効性については保健においても同様のことが言える。滝沢（2004）の主張は、こどもがからだを学び、からだを育てていくための保健体育における、重要な基盤になりうる』(Y)

⑤実生活との結びつき・実感を伴った学習から、体育だけでなく保健授業への言及を行っている。

以上の①～⑤の記述解釈から、体育哲学の立場から提起された賢い[からだ]という視点を新たに持つことの有効性が見出された。

(2) 教科教育学（保健科教育）の学術論文で示された視点とレポートに見る成果

今回の授業で取り上げた教科教育学（保健科教育）の立場からの論文は、以下の3本である。

- ・ 森昭三（1982）保健教材づくりに関する研究—典型教材の選択と創造—
筑波大学体育科学系紀要(5)：173-181
- ・ 森昭三（1985）保健教科書の教授学的検討。
筑波大学体育科学系紀要(8), p.227-234
- ・ 沢山信一（1979）保健教育の目標論—「科学的保健認識と自主的実践能力の検討」—。
東京大学教育学部紀要. 19：237-247.

上記3本の保健科教育の学術論文で紹介された主たる内容は、以下のようなものである。

森は、保健科教育の目的を、科学的認識を育てることに求め、そのために、「典型教材」の選択と創造が必要と考えている。授業の実践を考えることを方法の検討に止めずに、そこでの教育内容の中核を問う。

今年度から取り上げた沢山の論文では、1970年代後半頃から言われる「からだのおかしさ」（背中ぐにゃ、朝からあくび等）やアレルギーなどの健康実態を踏まえ、健康に育っていくためにはどのような力が必要かを問い、科学的認識から生活への実践的能力につなげるにはどうしたらよいかを問う。

保健科教育の研究者である小倉、数見らの考えから、保健授業の目標、教材の検討へ目を向けた。

『保健の領域においても、[からだ]を学ぶ視点は不可欠である。沢山（1979）は「生きて働く知」の重要性を説き、森（1982）は教材の選択と創造の重要性を述べている。単なる知識の伝達ではなく、子どもが実感を伴って理解できる教材こそが、保健における[からだ]の学びにつながる。たとえば、感染症を扱う際、単に病原体や予防法を教えるだけではなく、自分自身の経験や社会との関わりを通して感染症を再解釈できるような教材設計が求められる。そうすることで、子どもは感染症を「別の世界のこと」ではなく、自らの生活と結びついた現実として捉え直し、生活実践への意欲を高めることができる。(Y)

『子どもが目指すからだとは、一人ひとりが健康とはどのような状態なのか定義し、様々な状況に対応して意のままに身体を動かすことができることだと考える。それを、より良く生きていけるからだを育てることだといえる。理想のからだを手に入れるためには、学びの中から身体観を確立させていくことが基盤となってくるため、身体観の教育の必要性につながる。保健では、子ども一人ひとりが知識と経験につながりを持ち、自分のからだを理解し、その後の生き方を考える機会となる。そして、その学び

が、子どもたちの自己理解と他者理解、生涯にわたる健康な生活の意識の中核になっていくような設計が求められる。体育では、身体知を増やしていくことで、からだの賢さを身につける。保健には、自身の生活に生かせるようになるという目的があり、体育には、動きを習得するという目的があり、その目的の達成のために、教材を通して体について知り、理解を深め、実践するという共通点がある。このことから、からだを育てるための保健と体育の授業とは、その瞬間だけ考えてテストで答えることができればいいものでも、それに取り組みなければならないから嫌だけどできるように練習するものでもない。将来にわたって自分のからだを大切に続けるための学びである。健やかな体を目指して生活習慣を整えることや、運動ができるという喜びを感じることで、からだを育てることが自分の人生に役立つという納得感のある学びへとつながる。(K)

『身近な感染症を挙げることで生徒が学習内容を理解しやすくなり、自身のからだの問題として捉えられるようになる。これは、言い換えれば、からだでからだを学ぶことになる。感染症の原因やその対処法について理解することができれば、それを生活の中で実践することが可能になる。学びの生活における実践が可能になった時、からだは変化しており、賢くなっていると考えられる。すなわち、生徒に身近な題材を典型教材として扱うことにより、からだでからだを学ぶことができ、からだを育てることができる。保健の授業は、このようにあるのがよいと考えられる。(N)』

これらの記述から読み取れることは、いずれも、保健の授業で取り上げる「からだ」について再検討を試みているということである。

4 成果と課題

最終のレポートにおいて、授業で取り上げた学術論文の講読によって得た知識を用い、体育と保健の授業づくりの共通性について指摘するものが複数見られた。

プロジェクト 1 年目の検討では、体育と保健の相互関係への言及は見られたが、2 年目の検討においては、体育と保健の学習で目指されるべきものとして、より明確に「賢いからだ」が共通に設定される傾向が見出された。ここに、教科専門（体育哲学）の立場から提起した現象学的な視点が明らかに反映されていると考えられた。

体育と保健を別個の領域と見るのではなく、また、曖昧に単なる健康の追求を共通目標にするのではなく、この両者に共通するのは「運動とからだとの関わりや健康とからだとの関わりから、からだに気づき、からだを変えていくことで、よりよく生きるための賢いからだを育てていくという視点」「からだを通してみる世界が変化していることまで捉える視点」といった指摘である。

しかしながら、かかる視点の理解にはなお難しさがあり、取り上げる学術論文の選定、論文講読の仕方、現職教員を含めた教職大学院院生の多様性を踏まえた授業の在り方は、継続して検討されなければならない課題である。